

プロフィール



高崎経済大学准教授・友岡邦之さん

専門分野は社会学、文化政策論。日本社会学会、文化経済学会、文化政策学会所属。今年一月十四日に開かれた市主催のシンポジウム「文化ホールとは何か」でコーディネーターを務めた。「地域政策と市民参加」(ぎょうせい)、「指定管理者制度・文化的公共性を支えるのは誰か」(時事通信出版局)など著書多数。

昭和三十六(一九六一)年に建設された群馬音楽センターはその斬新な建築と設立の経緯から、高崎の文化の象徴として市民に愛されています。しかし、市民との協働によって建設された音楽センターも、築四十七年が経過し、老朽化が著しくなってきました。その音楽センターの将来が注目されています。新聞や雑誌などで、補修か新築かをめぐり、繰り返し取り上げられています。市民主体のシンポジウムも開催され、関心が高まり始めています。市は、第5次総合計画の中で新しい芸術文化ホール建設の計画を挙げていますが音楽センターの今後については、その方向性を決めてはいません。記念碑「昭和三十六年ときの高崎市民之を建つ」の碑文のとおり市民の浄財に支えられて建てられた音楽センターの今後は市民とともに考えていく必要があると考えているからです。今回号では、音楽センターが現在抱えている問題点などをお知らせしさまざまな立場からの「市民の声」を紹介します。私たちの音楽センターの今後を、皆さん、一緒に考えてみてください。

特集 音楽センターを考える

とぎの市民 これをどうする？

音楽センターと群響は誇るべき存在 だからこそ全市民的な議論を

音楽センターは、市民が関わって造ったもの。だからこそ、今後については、全市民的な議論を積み重ねていくことが何より大事です。

できれば、市民だけではなく、群馬県民をはじめとする市外の人にも、議論の輪に加わってほしい。そう考える理由は二つあります。

まず、音楽センターを考えるとき、群馬交響楽団のこともセットで考える必要があるからです。主に県の補助金で支えられている群響は、県の財産。群響をどんな楽団にしたのか、それによって今後音楽センターを改修するのか、新ホールを造

るのか、造るとすればどんなホールを造るのが変わってきます。

第二に、日本の文化政策の歴史を振り返るとき、音楽センターと群響は、全国に誇るべき稀有な存在だからです。音楽センターは、市民の積極的な運動の結果、生み出されました。「群響」というソ

フトがまずあって、それを機能させるための「ハコ」が用意された先駆的事例としても、貴重なものです。

音楽センターと群響は、市民によって築かれ、支えられてきました。両者ともに転機を迎えた現在、

これら先代から受け継いだ財産をどう扱うのか、市民が真剣に議論するべきです。その際にはもちろん、市の財政を踏まえた、建築や運営のコストを検討することも必要です。

中には、足を運ぶ機会がないから音楽センターには関心がない、文化ホールはお金の無駄だから必要ない、と考える人もいるかもしれません。

重要なのは、そうした「自分には関係がない」と感じている人や、音楽センターの歴史的意義をまだ知らない人にも、この問題に目を向けてもらうことです。